

“A Short History of Medicine”の著者
Charles Singer ~ Ashworth Underwood

酒井シヅ
深瀬泰且

(一) 『医学の歴史』について

シンガーの“A Short History of Medicine”の初版が出版されたのは一九二八年のことである。それ以後増刷のたびごとにシンガーはすこしずつ手をくわえており、いずれ広汎にわたる改訂版をつくりたいと考えていたが、そのための十分な時間をやりくりすることができなかったようである。しかし一九五〇年代には、いって大幅な改訂をほどこすよう、女婿にあたるアンダーウッドに依頼し、その依頼をうけたアンダーウッドは鋭意専心、その執筆にとりかかった。そしてシンガーが死亡した二年後の一九六二年に、これが第二版として出版された。

初版の三六八ページから、八五四ページにおよぶ大部になったこの書物は、一八世紀までをあつかった章は初版と大差はないが、それ以降の一九世紀と二〇世紀の部分については、各国からつぎつぎに発表される重要な医学研究や、この三〇年間に出版された医史学の研究によって、ほとんど原形をとどめないまでに加筆されている。

(二) シンガーについて

チャールズ・シンガーは一八七六年十一月二日にロンドンで生

まれた。父シメオンは、ユダヤ教の聖職者で、牧師としてユダヤ教の布教に熱心であったばかりでなく、ギリシャ語やヘブライ語の学者でもあった。

シンガーは一八九三年ユニヴァーシティ・カレッジに入学し動物学を学んだが、のちオックスフォード大学にうつり、医学を学んで一九〇三年に卒業した。最初の歴史論文は“On Benjamin Martin”（一九一）であった。その後ベンジンの聖ヒルデガルトについて研究をすすめ、これが「ベンジンの聖ヒルデガルトの幻想」として実をむすび、これによってオックスフォード大学から文学博士の称号を授与された。

第一次世界大戦後はオックスフォード大学の生物学史講師に就任したが、二年後の一九二〇年にユニヴァーシティ・カレッジの医学史講師に転じた。一九二〇年代のシンガーはおおくの著書をあらわしているが、その中には“Greek Biology and Greek Medicine”（一九二二）、“The Evolution of Anatomy”（一九二五）、“From Magic to Science”（一九二七）などがある。

一九三〇年代にはいってから、シンガーの学問の領域は医史学にとどまることなく、科学史の分野にまでひろがり、“A Short History of Biology”（一九三二）、“A Short History of Science”（一九四一）などを出版している。

ついでシンガーは広範囲な技術史研究の必要性を感じて、技術の史的变化について目をむけはじめた。E・J・ホルムヤードをチーフとする共同編集委員会をつくり、共同研究の成果を五巻からなる“A History of Technology”にまとめて一九五四年から

五八年にかけて出版した。

シンガーはすばらしい肉体の持ち主で、もしかがその気になれば、スポーツの分野でも成功をおさめたにちがいない。しかし晩年にはそのすばらしい肉体もいく分おとろえをみせはじめ、よく心臓喘息の発作におそわれ、それによって日常の研究活動がさまたげられるようになった。一九六〇年六月一〇日午睡中に、八三歳の生涯をとじた。

(三) シンガーの女婿アンダーウッドについて

アッシュワース・アンダーウッドは、一八九九年三月九日にダムフリースに生まれた。第一次大戦に参加し、戦後クラスゴータ学に入學し、一九二四年に卒業して、公衆衛生畑や医療行政面で活躍していた。

一九三〇年代の初めから、アンダーウッドの医史学への興味がふくらんでいった様子がうかがえる。グラスゴーからロンドンにうつって以後、王立医学協会の歴史部門へ“History of the 1832 Cholera Epidemic in Yorkshire” (一九三七)、“Lavoisier and the History of Respiration” (一九四四)などの医史学論文を提出している。

一九四六年アンダーウッドはウェルカム医史学博物館図書館の館長に就任し、医史学がかれのフルタイムの仕事になった。アンダーウッドの医史学者としての国際的な評価が確立したのは、一九六四年以降のことである。シンガーの名誉をたたえて、全世界の学者が執筆した論文集“Science Medicine and History”の編

集にさいしては、アンダーウッドはその著想においても、業績においても、この種の編纂物をあむ場合の基準となる実績をあげている。アンダーウッドの最後の大著は、ブルハーヴェのもとに学んだ七四名の英語圏の学生について、その背景、滞在期間、その後の経歴などを分析した“Boehave's men at Leyden and after” (一九七七)である。

晩年になって視力が次第におちてきた。重症の帯状疱疹、肺炎などにより視力はさらに急激に悪化し、読書も執筆もいちじるしくさまたげられた。一九八〇年三月六日、ウォルトン・オン・テムズの自宅でこの世を去った。八一歳の誕生日にわずか三日前のことであった。